

『シンドラーのリスト』映評

家を追われたユダヤ人家族に向かって「グッバイ、ジュース（ユダヤは出ていけ）」と叫ぶ少女。アウシュビッツへむかう列車を見送る少年が、首に手をあて「ギロチン」の真似をする。ナチス占領下のポーランドで、当時のユダヤ人に対するドイツ人の国民感情を見せつけられた気がして私は言いようのない恐ろしさを感じた。ハリウッドのヒットメーカーであるステイブ・スピルバーグのホロコースト映画、『シンドラーのリスト』のシーンである。

全編を通じてモノクロのスクリーンからは、いつもの拳銃の弾が飛び交い、恐竜が暴れ回るといったスピルバーグ映画に特有のあのめまぐるしいアクションは登場せず、ただ淡々と時代の証言者として見るものに語りかけようとしている。「あの悲惨な出来事を目撃者の世代は次に移ろうとしている。」だからこの映画をつくる必要があったのだとスピルバーグ自身は語っているが、事実「ヨーロッパ連合」（E.U）構想中のドイツでは、東ドイツ吸収後の経済不況下で「第三帝国」復活を声高に主張するネオナチの台頭が大きな社会問題にまでなっている。その意味でこの映画は未来に向う時代のメッセージでありうるのだと思う。

しかしこの映画を観終わって私が真先に思ったことは、スピルバーグはなぜ「ユダヤ人を救ったドイツ人」オス

カー・シンドラーの物語をテーマに選ばなければならなかったのだろうということである。中でも特に疑問だったのは、彼自身が雑誌のインタビューでエキストラも含めてほとんどすべての俳優をイスラエル在住のユダヤ人に演じさせたことについて「ユダヤ人はユダヤ人であり、非ユダヤ人にはたとえ生活がかかっていたとしてもユダヤ人を表現することはできないだ。」などと述べていたり、映画の内容についても原作には無い場面が挿入されている所などであるが、そこでは明らかに彼の意図がそのまま映画に反映されていると思うからである。スピルバーグは差別・抑圧されるユダヤ人を描くことによって逆に非ユダヤ人を差別することになってしまっているのではないだろうか。つまり極端に言えばユダヤ・エスノセントリズム（＝シオニズム）であり、ハリウッド流に言う勧善懲悪―ハッピーエンドという図式をそのまま歴史に反映していこうとするこのようなスピルバーグの発想が問題だと思われるのである。

一、シンドラーは英雄か？

オスカー・シンドラーは一九〇八年当時のオーストリア帝国の工業都市のツヴィダウ（現在のチェコ）で機械工場を経営する父親の一人息子として生まれる。青年時代のシンドラーはオートバイに熱中する「良家のお坊っちゃん」でしかなかったのだが、一九二九年の大恐慌のあおりをうけて父親の工場は倒産、シンドラーは電気会社のセールスマンなど職を転々としながら妻エミリーととともに生計を立てる。そのころ彼はナチスに入って

おり、三九年のヒットラーによるポーランド侵攻後にはドイツ軍將校から情報収集の依頼を受けクラクフにやって来る。映画『シンドラーのリスト』はここから始まる。

映画の冒頭でシンドラーはタキシードを着込みドイツ將校の集まるクラブへ赴いては彼らに酒を振る舞ったりして取り入り、強いコネを築いていく。その甲斐あってかドイツがポーランドから接收したホーロー工場を貰い受けることになるのである。

シンドラーはこのホーロー工場でサラダ用食器や鍋などを製造する、それも例のドイツ將校のコネをつかい強制収容所行きのユダヤ人労働者の斡旋を受けて殆どただ同然の労働力を使いながら。そしてその後シンドラーは工場に軍備部門を増設し巨大な利益を得るのであった。

このクラクフ虐殺までのシンドラーの行為はどんなに彼に同情してみても悪徳資本家ではない。ポーランドでのナチス侵攻に伴うスクラップアンドビルドを自らの懷をも肥しながら積極的に担いつつ、なおかつナチのユダヤ人追放政策を大量のリベートと引換えに、不足する労働力の安定的確保に振り分けていくという行為にはヒューマニズムの一かけらも感じることはできない。しかしその後シンドラーはナチのあまりにも非道な行為を許せず、ついに「正義」の行為に出る。

それは一九四三年の二月、ナチスの戦局悪化を受けてゲッターを解体し新しくプアシェフに強制労働収容所が作られることになり、大量のSS（ヒットラー親衛隊）がクラクフのユダヤ人居住区を急襲した時のことだ。逃げまどう人々に容赦なく浴びせられる機関銃の雨。大量の犠牲者を離れた丘の上から目撃するシンドラー。スピルバーグはこのシーン——赤い服を着たユダヤ人少女が追手を逃れるシーン——をパートカラーを用いて印象的に演出する。後にこの少女が殺害されていることが明らかになるに及んでシンドラーの心境に変化が起こる伏線である。スピルバーグ自身も「これは一人のドイツ人でナチで実業家で戦時利得者の女好きが、つまりひと

つの生命を救うには似つかわしくない男が、そればかりか一〇〇〇を越す人の生命を救う物語だ」と語っている。事実ブアシエフ収容所の所長アーモン・ゲート（イギリス生まれのラルフ・ファインズというシェイクスピア俳優が演じていて物凄くリアルである）の非道さと対比してシンドラーの「人道者」振りはかつてのシンドラーとは全くの別人のようである。

こんなシーンがある、真夏の蒸し返すような日、アウシュビッツに向かう列車には痩せこけたユダヤ人が鯨詰め状態になっている。ゲートら将校たちはそんな光景を前に何のためらいも見せず歓談しているのだが、シンドラーにはこの先明らかに「死」が待っているユダヤ人を前にして居ても立っても居られない。シンドラーは護衛を買取して死にゆく彼らにホースで水を万遍なくかけてやるのだ。そんなシンドラーをせせら笑うゲート。このシーンに象徴されているようにこの『シンドラーのリスト』のテーマは喪失した人間性の回復であり、ヒューマニズムなのである。ユダヤの律法であるタルマッドには「ひとつの生命を救うものは、世界を救える」とありシンドラーの行為はまさにそのようなものとして観客に語りかけているようである。

しかしそういったシンドラーの英雄的行為も社会的側面から見ると評価の仕方は変わってくる。つまり当時の状況はそんなに安易に表現されるものではないということだ。確かに私はシンドラーがとった行動は「偉大」な行為だと思う。だが一九四〇年代のドイツ・ポーランドで、冒頭にも紹介したようにまだ幼い少年、少女までもがユダヤ人を迫害している社会的な雰囲気なかで見ると、明らかに彼のとった行動は突飛で常軌を逸したものに他ならないはずだ。あくまでそういったパラダイムのなかで彼の善意は「小指の先ほどの」ちっぽけなものになってしまっているのであり、「世界を救う」どころか歴史の激動のなかでたちまちに消え失せてしまうであろう。

例えば最近アメリカのTVで放映された『アメリカとホロコースト——欺瞞と無関心』ではアメリカ政府が先

頭に立って反ユダヤ主義を煽動していたことが明らかになっている。『NewswEEK』四月十三日号）二九年の大恐慌を受けユダヤ人移民による労働力の余剰を見越しての対応であるが、そもそも植民地強奪戦としての第二次世界大戦の渦中にあるのは全世界的に排外主義が蔓延している訳であって「アメリカの良心」みたいなシンドラーの善意などセンチメンタルな行為としての意味をしか持ちえないのではないだろうか。しかしスピルバーグは殊更にこの事実を持ち上げようとするのだ。私は彼がシンドラーを「聖人」としては描いていないといいつつも明らかにシンドラーをシンボライズされた偶像として描いているように見えて仕方がない。

二、スピルバーグが言いたかった事

この映画のクライマックスは一九四四年戦局の悪化からナチスが大量のユダヤ人を抹殺するという最終的手段に打って出た際に、シンドラーが自分の全財産を投げうって千二百人ものユダヤ人リストを作り、彼らをチェコの自分の工場へと移転させる場面である。列車には男性と女性に分かれて乗りプアシェフを出発したのであるが、男性の車両が無事ツヴィダウへ到着したのに比して女性の車両はなんとアウシュビッツへ護送されてしまうのである。到着後頭の毛を短く切られた彼女たちは毒ガスが出ると噂の「シャワー室」へと送られる。焦るシンドラーの顔と死を目の前にした彼女たちの顔がサスペンス感を際立たせる。結局シャワーから出たのは水で、駆けつけたシンドラーに全員無事助け出されるのではあるが。

そしてついにナチス・ドイツが連合国に敗北し、立場の逆転からこんどは連合国によって「追われる」身になったシンドラーが自分が助けた千二百人のユダヤ人を前にして「このダイムラーを売れば、このナチスバッチを売ればまだ何人か救えた」と涙する。こちら目頭が熱くなってくる場面である。しかしこのなんと感動的なシーン実は原作のどこにも書かれていなくてスピルバーグの脚色であるらしい。また例のシンドラーの心境変化の根拠として描かれている「虐殺された赤い服の少女」も実際には生き残っており、ニューヨークに在住しているという。まあ原作に忠実か否かは問わないにしてもスピルバーグの意図の一端をかいま見ることができるのではないだろうか。

そしてこれは原作どおりなのだが「シンドラーのユダヤ人」達がダイムラーで去っていくシンドラーを見送った後、ポーランドからやってきたソ連軍将校（かれはユダヤ系ソ連人なのだそうだが）によって「解放」される際の場面である。原作を引用する。「彼はまっすぐ囚人たちの顔を見つめて言った。「君達がどこへ行ったらいいかわたしにはわからない。東へは行くな——それだけは言える。しかし、西へも行かないほうがいい」彼は手綱を解くのに戻った。「どこへいこうと、われわれは嫌われ者なんだ」(トマス・キニーリー『シンドラーズ・リスト』)ここで言われる「東」とはスターリン支配下のソ連であり、「西」はそれ以外の連合国を指している。それでは「嫌われ者」の彼らが向かう先は何処なのか？映画には描かれていない。しかしエピソードのエルサレムに安置されているシンドラーの墓に参る六千人と言われる「生き残り組」の姿が象徴しているようにそれは「イスラエル」であり、ここにこの映画の性格をはっきりと見て取ることができるのである。

稀しくも今年はパレスチナと「イスラエル」の「和平合意」が行われていて、対等な立場での「和平」を望まないユダヤ人が先のヘブロン虐殺などを見ても明らかに存在している。そういった政治状況とこの映画を結びつけるのは酷な話かもしれない。しかしすくなくともスピルバーグの意図の中には自らのユダヤ人としての明確な

意識が介在していたことだけはあきらかである。「ユダヤ系であることが財産と思える時が来るとは思わなかった。自分自身にあたえられた役割のようなものをこの映画で果たすことができたと思っている。」彼がこの映画を『栄光への脱出』のごときシオニズム映画にしようとしたのか私にはわからない。しかしその可能性だけは否定できないだろう。

三、日共の映画評価について

日本共産党は『前衛』五月号でこの『シンドラーのリスト』の映評を載せている（山田和夫署名）。ここで日共―山田はスピルバーグを映画作法という技術的な側面から考察しており、内容に全く踏み込まない（＝踏み込めない）的外れな評論をしているのでここで最後に取り上げておく。

山田は、スピルバーグの「執念」を高く評価する。八二年にキニーリーの原作が出版された際にスピルバーグはいち早く映画化権を買ったのだが自らの未熟さから当時の映画化を断念せざるを得なかった。そして十年後自らの成熟とボスニア、イラクでの民族紛争の激化を契機にして彼はこの映画の製作を決意する。そこで山田はスピルバーグや製作者たちがいままでの彼らが作ってきた「作風」とあまりにも対照的なこの題材を製作できるのかと問いながら「何よりもスピルバーグ達には、この映画にこめる「執念」といえる圧倒的な意欲があった」という。だけど「意あって力足らず」ではしょうがない。それではスピルバーグは映画化などできないのか

というと彼にはその「力」もあったというのだ。

まったく日共の理解力の底が知れるというのだが、このようなスピルバーグの「映画作法」を殊更評価し、いまの日本映画界の萎えた創造環境もこれを見習うべきだなどといった評価は、およそスピルバーグの思いをどこまで理解しているのかと逆に問い返したくなるようなお粗末なものだ。

スピルバーグの問題意識はシオニズムへの傾斜という傾向を含んだものであれ、なお人間存在における深い洞察を含んだものであり、とても日共―山田の言うような「映画作法」といった技術的な要素に一元化されえるものではないはずだ。だからスピルバーグは十年間もこの作品を作れなかったのだと私は思う。

人間の生と死を極限の状態の中で描こうとしたこの『シンドラーのリスト』は、だから私も含めて多くの人々の心を揺さぶったのだと思うし、人間としていかに生きるかという問いかけを発しているからこそわれわれの心を打つのである。

価値観の多様化をむかえた現在。荒廃したわれわれ人間の心を問題にするシリアスな本なりドラマなりが若者の間で受けているという。そういった状況は別にブームのような一過性のものではなく、普遍的な価値を求める人間の当たり前の要求にすぎないのだと思う。その意味でこの映画が提起した問題意識はわれわれ自身の問題意識でもあるのではないだろうか。